

《思い思いの若者たち》

人の世はやはり優しくあってほしい

顧問 布袋 太三

最近「インテリジェンス」という言葉をよく見かけるようになった。ふつうは「知性」や「知的」な話かと思うが、現在ではもっぱら「軍事分析」や「諜報機関」のことを指しているらしい。たとえば「インテリジェンスの確立」と政府が言うと、アメリカやロシアのようなちゃんとした諜報機関を創設することを意味しているという。

周知のとおり、日本の新しい内閣ははっきりと「強い国づくり」を目指そうと公言している。そのために防衛装備を飛躍的に増強させることや、インテリジェンスの早急な整備や「非核三原則」の見直しも必要としている。

こうした政治の動きをどうも危ういと思っているのは、私だけだろうか。

先日、私は「治安維持法 100 年を考える」という弁護士や研究者たちの大阪の勉強会に参加した。この法の始めの 20 年間は、折からの無謀な戦争遂行のためにまさしくオールマイティであった。ちょっとでも反戦や反権力の疑いがかけられると直ちに投獄され、凄まじい拷問が待っていた。耐え難いほどの残酷な事例が次々と紹介された。こんな悪法も敗戦とともに廃止されたが、今の私たちはかつての不条理を完全に克服したと言えるのか。時計が巻き戻されないように今一度考えたい。

さて、先日の毎日新聞が、何年か前の東大の入学式での上野千鶴子の祝辞を回顧していたことに少しふれたい。

確か 2000 年以降の日本は「ひきこもる若者」たちが社会の耳目を集め出した頃で、時代的には「自己決定・自己責任」を原理とする新自由主義という風潮が広がっていた。「頑張れば報われる。報われないのはあなたの努力と能力が足りないせいだ」とされ、たまたま「成功した者」が「私に出来たことがどうしてあなたに出来ないのか？」などと言って社会の分断を深めていた時代だ。実に残酷で横柄だ。最後に上野は「強がらず、自分の弱さを認め、支え合って生きてください」とやや皮肉に祝辞を締めたが、要は勝ち組の東大生に向かって、彼女は新自由主義の有り様に鋭い警告を発したのだ。

私はこの上野に数年前に出会っていた。反骨の歴史学者・色川大吉の追悼集会の場であった。色川は上野とは長年の親友であった。集会は終始ほのぼのと心温まるような雰囲気、静かに色川の業績を偲んだ。上野は目立たず穏やかにこの場に溶け込んでいた。生涯民衆に寄り添い続けた色川も凄いが、上野もまた希有な社会学者だ。時間が許せば、ぜひ彼女の著書に目を通してほしいと私は思っている。

ふれあい人権フェスタ2025

毎年開催されている「ふれあい人権フェスタ」。前回に引き続き田辺市での開催となりました。場所は「ハナヨアリーナ」です。当日は、就労準備支援事業でみんなが作ってくれた焼菓子を販売したり、居場所の様子などを展示したりと啓発活動を行いました。多くの方が興味を示してくれ、和歌山県知事もお立ち寄りくださいました。

舞台では「KIRARA：よさこい踊り」「フリーキッズ：ダンス」「副島 淳さん（俳優・タレント）の講演会」などと盛り沢山の中、「じんけんクエスト」（参加者が冒険者として、各団体のブース・テントを回りそれぞれの質問に答えてシールをゲット）というイベントなどもあり、シールを探しに多くのこどもも来てくれました。ひなたの森の質問は「わたしたちの仕事は次のうちのどれでしょう？」です。展示物を見ながら懸命に答えてくれました。



田辺市生涯学習フェスティバル2025

昨年 11 月 22 日（土）、田辺市民総合センターにて開催されたイベントに出店させていただきました。ホットコーヒーとカレーライスを販売させていただき、13 時半頃にはカレーライスが完売しました。

「美味しかったよ」と声をかけていただくこともあり、その言葉に次回も頑張ろうという気持ちが湧いてきました。やっぱり、優しい気持ちは人をやる気にさせてくれますね。カレーライス作りから販売まで……たくさんのメンバー達がんばってくれました。

「ご購入いただきました皆様、お手伝いしてくれたみんな……本当にありがとうございました」

